
ゼロと忠実な使い魔達

鉄分

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロと忠実な使い魔達

【Nコード】

N8581X

【作者名】

鉄分

【あらすじ】

これはかつてゼロと呼ばれた伝説のメイジ、ルイズと彼女に忠誠を誓った複数の使い魔の物語

第一話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第一話

トリステイン魔法学院に在籍しているとあるメイジ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは自身の眼前に広がる光景に啞然としていた。

自身の目の前に存在している物体は何なのか、そもそも本当に自分がサモン・サーヴァントで召喚した存在なのかと疑問に感じてしまふほど異質な物体がそこには在った。

それは全長が10メートルを超えるような巨大なゴーレムだった。頑強な装甲が全身を覆い、見る者にその剛健さを如何なく印象付けている。

脚部の半ばまでをカバーしているベルトのような表皮には表面に先端が鋭くとがったスパイクのような棘が確認できる。腕部は共に丸太を通り越して土管のように太いが、右腕部が対となる腕よりも明らかに重厚でアシンメトリーとなっている。

そして、最も特異な特徴はその顔だ。堂々とした体躯の上には阿修羅を想起させる恐ろしい相貌をした頭部が搭載され、

太陽の光をうけて鈍色に輝いていた。

これが、かつてゼロと呼ばれた伝説のメイジ　ルイズと、死と破壊を司るディセプティコンの

リーダー　メガトロンの初めての邂逅であった。

物語は時を少し遡る……

ここはハルケギニア大陸北西部に位置する小国トリステインが唯一

保有するメイジ養成所、トリステイン魔法学院。魔法学院では現在二年次に進級する生徒たちが自身のパートナーとなる使い魔を召喚、契約するサモン・サーヴァントと呼ばれる儀式を執り行っていた。この儀式は術者の魔法属性と専門課程を見極める意味合いも兼ねているため生徒たちの表情は真剣そのものだ。

大多数の生徒たちは各々が召喚した互いの使い魔を褒めあったり自慢しあいながら何気ない会話を楽しんでいた。ただ一人を除いては、

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは杖を一際固く握りしめ、焦る気持ちを抑えつけながら自身の精神を集中させていた。

蒼茫とした草原にいるのはもはや彼女を除けばルイズのクラスを担当している火属性のメイジ、コルベールのみである。そう彼女は既に何回もサモン・サーヴァントの儀式を失敗してしていた。

使い魔召喚のための呪文「サモン・サーヴァント」を唱えては爆破を繰り返すルイズに周囲は呆れ、彼女を置いて学院に一足早く帰還していたのだ。

彼女の同級生であるキュルケは他の生徒が帰還してもしばらくはルイズの召喚魔法を見守っていたのだがちょっとした争いが原因で彼女もルイズを置いて学院に帰ってしまったのだ。

「ミス・ヴァリエール、今日のところはそこまでにして召喚の儀式はまた明日に持ち越しませんか？」

「もう一度、もう一度だけお願いします！！ チャンスを下さい！！」

「…わかりました。ではこれで最後にしましょう。リラックスですよ ミス・ヴァリエール。」

自身の禿頭の皮膚で太陽光を反射させながらコルベールはルイズに尋ねたが、ルイズは譲るそぶりを一切見せずに前方を見据える。

このサモン・サーヴァントの儀式は進級試験も兼ねている。そのためルイズが召喚に成功することが出来なければ、彼女はよくて留年悪ければ退学を通達されることすらありえたのだ。

トリステイン魔法学院の学院長であるオールド・オスマンはルイズが仮にサーヴァントを召喚することが出来なくても品行方正な生徒であり、大切な己の生徒の一人である彼女を退学にするようなことは決してありえないだろう。

しかし、ルイズのプライドがそれを許容できるはずがない。ルイズは貴族だ。加えて彼女は名門公爵家ヴァリエール家の息女である。

この世界では魔法が使えるメイジこそが貴族であり、貴族は平民を統治する支配階級に位置している。そして貴族の証は魔法を使えることだった。

加えて公爵家の娘がサーヴァントを召喚することすらできずにいる、などという事実は到底受け入れられることではなくルイズがサーヴァント召喚に失敗した場合、世間体を気にした公爵家によってルイズは家に呼び戻されてしまうだろう。

コモン・マジックですら碌に扱えないと周囲の生徒たちに嘲笑され続けていたルイズにとってサモン・サーヴァントの儀式は他の生徒を見返す絶好のチャンスである。

並々ならぬ決意を胸にルイズは儀式に臨んだのだが、結果は前述の通りである。

（何で！？何で何も出てこないのよっ！！）

（大丈夫よ…絶対大丈夫！次は絶対に成功するわ！あれだけ練習したじゃない、必ず次は成功させてみせる！！

ドラゴンとかグリフォンとか贅沢は言わないから！何でもいいからお願い！！）

（でも、カエルはちよつと嫌かなあ・・・）

ルイズは同級生である水のメイジ・香水のモンモランシーが召喚したカエルの使い魔ロビンを思い出して、独りごちた。そして彼女は自身の持つ杖を握る手に更に力を込めると杖を振り上げ、全ての想いを込めて呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！
エール！

五つの力を司るペンタゴン！！

私の運命に従いし、”使い魔”を召喚せよ！！」

その呪文と共に今までとは比べ物にならないほどの爆発が起きた。強烈な爆風が彼女を襲い、小柄な体は地面に背面から投げ出される。コルベールが自身の数少ない毛髪を幾本か犠牲にしたところで物語はプロローグへと至る。

第二話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第二話

「コルベール先生、これは一体なんなのでしょうか？」

ルイズの目の前には巨大なゴーレムが横たわっている。しばらく観察してみても動く気配がないところを見るとこれは生物ではないのであろうか。

自身では明確な解答が判然としないため、彼女は引率担当教官であるコルベールに尋ねてみた。

「・・・これは、見たところゴーレムのようですね。しかし、これほどまでに精緻で精巧なゴーレムは 見たことが無い。」

「しかも、未知の物体で構成されている部分がある！！凄い！凄いですぞ！！ミス・ヴァリエール！さ あ契約を」

矢庭に興奮しだしたコルベールとは対称的にルイズは己の顔に落胆の色を張り付けていた。

動かず生き物ですらないこんな物体をどうやって使い魔にしるというのか、ルイズは唇を噛みしめると目の前に横たわっているゴーレムの顔にあたる部分によじ登り呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

コントラクト・サーヴァントの呪文を紡ぐとゴーレムの口にあたる部分に軽く口づけを交わす。

ルイズはゴーレムの恐ろしい表情にやや気圧されながらも契約をこなした。

すると、心停止した人間が電気ショックを受けた時のようにゴーレムの胸部がドンツと跳ね上がった。

「きゃっ！」

「大丈夫ですか！！ミス・ヴァリエ……………これは」

再び地面に放り出されたルイズの安否を気遣うコルベールであったが、目の前に広がる状況の変化に気を取られてしまう。

目の前に横たわっていたはずのゴーレムが動き、赤く輝く二つの双眸で自分たちを睨みつけていたからだ。そして、目の前のゴーレムは言葉を発した。

「ここは、どこだ……………俺様は……………何だ……………」

小さな少女によって召喚された身の丈10メートルを超える巨大なゴーレム、メガトロンは困惑の極致にあった。自分自身が何者であったのかが分からない。

自分自身の名前・兵装等の自分に関することは間違いなく記憶している。しかし、自身が何を思い何を為していたのかが分からない。己には何か重要な目的があったような気がするが、自身の記憶領域を探ってみても何も見つからない。

金属生命体である彼は言葉どおりの意味で一度記憶した事柄を二度と忘れることは無い。しかし、メガトロンは自身を除いた凡そ全ての記憶を失っていた。

彼の記憶消失がサモン・サーヴァントによるものなのか、はたまた、

エネルゴンの塊であるキューブをその身に受け止めたことが原因なのかは誰にも分らない。

ただ一つだけ分っていることがある、それは少女の目の前にいるゴーレムはディセプティコンのリーダーであるメガトロンではなく、独りのメガトロンそのものが其処には在った。

「ここは、どこだ・・・俺様は・・・何だ・・・」

「凄い！！言葉が喋れるのね！！」

困惑するメガトロンを余所にルイズは弾んだ声をあげる。先ほどまでの落胆した様子からは考えられないようなはしゃぎっぷりだ。それもそのはず、人語を理解できるのは限られた高位のゴーレムが幻獣だけだからである。

「貴様は誰だ？」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。あなたのご主人様よ！」

メガトロンの質問に答えるようにルイズは叫び返す。

「あなたは何もの！」

「俺はメガトロンだ。」

ルイズが名を尋ねたのに対し彼は答えた。それは重い声だった。悠久の年月を感じさせながらも、闘争の感情をその内に孕ませている。

「先ほど貴様は主人といったがそれは一体どういう意味だ。」

「それは、それは、わたくしが説明しましょう！！」

目の前にいるゴーレムから発せられる剣呑な雰囲気を感じ取ったのかコルベールが仲裁するように両者の間に割って入った。

一通りコルベールの説明を聞いたメガトロンは大笑した。

「こんなちんちくりんが俺様を使役するだと！ 笑わせるな！！」

「おい、貴様、笑わせたいのならば もっと面白いジョークを持ってこい」

ルイズはメガトロンの傲慢な態度に食って掛かる。

「貴様つてなに！？ご主人様に向かってそんな口きいていいと思ってるの！？」

恐れ知らずな少女である。

「というか！さつきちゃんと名乗ったでしょ！？覚えなさいよ！私はルイズ！ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！」

「メガトロン、あなたは私に使い魔として召喚されたの！使い魔は一生メイジの手となり足となり従うのよ！ だから私はあなたのご主人さまなの！分かった？！」

メガトロンの素性を知っている人が聞けば卒倒するようなセリフを言い切るとルイズは胸を張る。

いままで座って話を聞いていたメガトロンはルイズの言葉を聞き終わると即座に立ち上がった。

「何よ！ややややるっていうの？！」

ルイズは震えながらも杖を取り出して構える。しかし目の前にいるゴーレムは彼女に向かい合わずにあらぬ方向に向かって自身の左腕

を振るった。

「え？」

ルイズは啞然とした。自身の使い魔であるゴーレムが何でもないように左腕を振るっただけで巨大な大穴が生まれたからだ。

メガトロンは自身の左こぶしにあたるモーニングスターをアイアンメイスとして地面に向かって叩きつけた。その一撃は大地を深々と抉り、土ぼこりを巻き上げる。

叩きつけたモーニングスターをこぶしに取り付けなおすと彼はルイズに向かって再び話しかけた。

「どうだ、これが俺様の力だ。それでも貴様ごときが俺様を使役するとのたまうか。」

ルイズの前方には人間が軽く20人は入れるような大穴がぽっかりと空いている。目の前にいるゴーレムは彼女に主としての資質を問うているのだろうか。

しかし、ルイズは退かない、眼前で強大な力をまざまざと見せつけられても彼女の眼の光は失われず、しっかりとその先のメガトロンを見据えていた。

「メガトロン、あなたは私の使い魔よ、それは絶対に変わらない。私は確かに弱いわ、コモン・マジックすらもまともに使えない・・・、でもいつか絶対に強くなる、強くなってみせるわ。強くなってあなたが誇れるようなメイジになってみせる！だから・・・だから私に仕えなさい！メガトロン！！」

ルイズの決死の叫びに対してメガトロンは内心驚嘆していた。目の前にいる小さな生き物は自身の力を見ても一切物怖じせず己を見

つめている。

非力であるにもかかわらず、力に屈しないルイズの強さにメガトロンは興味を抱いた。気が付けば彼は目の前にいる小さな少女に片膝をつき頭を垂れていた。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、力に屈しない心をもつ強き者よ。

永遠の忠誠と絶対の服従をここに誓おう。先程の非礼を許してくれ、

」

ルイズは片膝をついたメガトロンを見上げながら微笑む。

「気にしてないわ。メガトロン、これからよろしくね」

それはゼロと呼ばれるルイズに初めて使い魔ができた瞬間だった。

・メガトロン：元ディセプティコンのリーダー strength

rank 10

第三話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第三話

使い魔召喚の翌日ルイズは自身の部屋のベットの上で目覚めた。

窓から差し込む明るい日差しがよく晴れた朝だということを教えてくれる。

ルイズはまだ半分寝ている顔をしながらも日頃の習慣に従い、学院の制服に着替え始める。

その様子は寝起きにも関わらず上機嫌だった。

自身の身支度を済ませると朝食の時間が近づいていることに気づき、部屋の扉に手をかけた。

ルイズが朝食を食べるために部屋の扉を開けると隣の部屋からも人が出てきた。

「おはよう。ルイズ。」

燃えるように赤い髪が印象的な少女がそこにはいた。

褐色の肌をした肉体とほりが深い顔立ちは美しいと多くの人が思うだろう。

大きな胸とそこを強調するようにブラウスのボタンを二つも外している姿は周囲に色気を振りまいている。

「おはよう。キュルケ。」

かけられた声に気づいたルイズは少女のほうを向き挨拶を返す。

その顔はやや不機嫌そうな色に染まっていた。

声をかけてきた少女の名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

トリステイン王国の隣国、帝政ゲルマニアの伯爵令嬢である。

またツェルプストー家はルイズの実家であるヴァリエール公爵領と国境を挟んで向こう側にある。

しかし、両家の間には因縁深い事件が多く二人は犬猿の仲にあった。またルイズはキュルケのプロポーシオンを少々妬んでいる事もあり特に仲が悪い。

もつとも、キュルケはルイズをからかう事はあれど悪い感情を持っているかどうかまでは分からないが。

ルイズはキュルケに尋ねた。

「昨日はどうだったのよ、」

ルイズの問いに答えるようにキュルケは話を進めた。

「私は一発で成功よ。しかも……フレイムーおいでー。」

キュルケの部屋から呼び出したのは深紅の皮膚をもったトカゲだった。

背は1メートルほどもあり四つの足は力強く、太かった。尾の先からは炎が踊っている。

「見て立派な火トカゲでしょう。この見事な尻尾の炎、ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ。好事家に見せたら値段なんかつかないわ。」

「ふーん。」

「？」

キュルケは拍子抜けたように首をかしげる。いつものルイズであれば悔しがるなどの反応が見られるはずだが、いまのルイズからはそのような

様子は欠片も見られない。むしろあり余る余裕すら感じられる。

すると、キュルケは自らの使い魔であるフレイムの様子がおかしいことに気が付く。

震えているフレイムに彼女は声をかけるが様子は変わらない。恐怖

しているのだろうか？

その視線はルイズに釘付になっている。

キュルケは再びルイズに目を向けるとヒツ、と軽い悲鳴をあげた。何故ならばルイズのすぐ傍から爛々と輝く巨大な赤い単眼が覗いていたからだ。

ルイズは震えるフレイムをニマニマと見つめると傍らに控える使い魔に声をかける。

「だめよ、ラヴィツジ。怯えちゃってるじゃない、この子は敵じゃないわ。」

ラヴィツジと呼ばれたそれは大きなジャガーであった。それは小柄だが人間であるルイズの肩口に届くほどの巨体を有している。メガトロンと同様に全身を装甲が覆い、身体の堅牢性が一目見て分かる。

口にはのこぎりのような乱杭歯が無数に生えそろっており、歯を剥き出しにして目の前のサラムンダーを威嚇していた。

背中の後脚部には一対の円筒形をした筒が取り付けられていて、その先端はキュルケに向けられていた。長くしなやかな尾は人間の脊椎を思い起こさせる形状をしており、先端には三つの棒状の物体がアンテナのように掲げられている。

「ふふふ、私の使い魔、ラヴィツジ、ふへへ」

ややトリップ状態にあるルイズがそのジャガーの首筋を撫でるとジャガーも嬉しそうに巨大な単眼を細めて彼女にすり寄った。

その様子を口をパクパクさせながら眺めていたキュルケはルイズに話しかける。

「ちょちよつと・・・それ、何？ 見たところ動いているようだけれど。」

「ラヴィツジよ、私の使い魔 甘えん坊でかわいいのよ。」

「で・・・でもそれ金属でできてるわよね？機械なの？」

「違うわ！ラヴィツジは生きてる。だってこんなにかわいいのよ！機械だなんてありえない。」

どう見積もってもかわいいとは思えない凶悪な人相をしている獣を愛おしそうになでるルイズをみてキュルケは嘆息した。

一人と一匹は朝食をとるために、『アルヴィーズの食堂』へと向かう

そこは、食堂とは言えとても華やかな作りが施されたいかにも貴族趣味、といった建物である

中も豪華絢爛という言葉がぴったり当てはまるほどの内装が施されている。

中には百人はゆうに座る事ができるテーブルが三つ並んでいる。

学年別に分かれているらしく、ルイズはラヴィツジを連れて二年生所定の真中のテーブルへと進んだ。

ルイズは自分の席へと進み着席すると朝食を食べ始めた。

ラヴィツジがルイズの周囲を油断なく歩き回る中、彼女は内心鼻高々であった。周囲からは自分の使い魔であるラヴィツジに対する畏怖と関心の入り混じった声が聞こえてくる。

彼を召喚したのが自分であるという自負が彼女を良い気分にさせていたのだろうか、朝食を食べ終わるとルイズはラヴィツジをつれて教室へと向かった。

ルイズは教室でラヴィッツを撫でながら教科担当の先生を待っていた。彼女に撫でられているこの巨大な獣の存在に初めて気づいたのはコルベールであった。

メガトロンがルイズに使い魔としての忠誠を誓っていた際に彼の巨体の陰に横たわっていたラヴィッツを発見したのだ。

メガトロンはコミュニケーションをとるとルイズにこの獣についての事実を話し始める、どうやらこの獣は俺様に仕えているらしい、と。

そして、己はその巨体さゆえに主に四六時中付き従うことは出来ないため部下であるこの獣を主の身边警護に任ずること、この獣はラヴィッツという名前を持っていることをルイズはメガトロンから通達される。

「ラヴィッツよ、貴様の最優先事項は主を守ることだ。全てを後回しにしてこの任務を達成しろ。」

メガトロンの命令を受諾したラヴィッツは今朝からルイズに付き従っている。

当初は四足獣であるラヴィッツの見た目に押されていたルイズも自身に甲斐甲斐しく仕えるこのしもべに対する愛情が湧いてきたのだろつか、いまではラヴィッツを周囲が引いてしまつくらいに可愛がっている。

教室で待機していると他の生徒も自らの使い魔を引き連れてやってきた。教室内には様々な使い魔がいる、フクロウに今朝のサラマンダー、モグラなど多種多様だ、

ただしルイズの使い魔であるラヴィッツを皆が恐れているという共通点を除いては、だが。

教壇に中年の女が現れた、おそらく教師なのだろう、一旦教室が静かになる

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。この赤土のシュヴルーズ、
こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ。」

と満足そうに生徒と使い魔を眺めるシュヴルーズは

「あらあら、な・中々変わった使い魔を召喚したようね、ミス・ヴァリエール」

ルイズとやや怯えながらルイズの傍に佇むラヴィツジを交互に見た。

教室にざわざわとささやく声が木霊した。

「気持ちの悪い獣を召喚しやがって、檻にでも閉じ込めておけよ！
！ゼロのルイズ！」

ルイズは席を跳ねるように立ち上がりラヴィツジを宥め始める。見るとヤジを飛ばした少年―マリコルヌに今にも跳びかかるうと身構えるラヴィツジがいた。

おそらくルイズが止めなければラヴィツジは己の持つ鋭利な爪で彼をズタズタに引き裂いていただろう。自分が馬鹿にした少女によって命を救われたことを知らないマリコルヌはいまだにルイズを罵っていたが、ラヴィツジの巨大な単眼によって射竦められていた。

加えて、「ミスタ・マリコルヌ。友達を馬鹿にするものではありません」

というシュヴルーズの言葉とともに目の前に現れた赤土に口をふさがれた。

第四話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第四話

「ちょっと失敗したみたいね」

そう言ってボロボロの姿のルイズは散らかった教室の片づけを行っていた。

『火』『水』『土』『風』の魔法の四大系統。失われた系統である『虚無』。

それら魔法と生活との密接な繋がり等々を説明するあたりまで授業は問題なく進められた。

しかし、シュヴルーズが錬金の実演を行い、それをルイズにもやらせたところから問題は発生した。

ルイズの錬金の魔法によって教卓の上に置かれていた石が爆発をおこし、教室を半壊させたのだ。

あらかじめ机の下に避難していた生徒たちにも甚大な被害が及び

「何やってんだ！ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率、ほとんどゼロじゃないかよ！」

そんな怒号がラヴィッジがいるにも関わらず教室の内に響き渡った。

失敗魔法による爆発で半壊した教室の片付けを命じられたルイズは黙々と掃除を行った。

ラヴィッジも片づけを彼女と一緒に手伝っていたが重い沈黙が場を支配した。

しばらくするとルイズが唐突に口を開いた

「わかったでしょ？私がゼロって呼ばれてる理由……」

「そうよ、私は魔法の成功率”ゼロ”%、だからゼロのルイズ。笑っちゃうわよね、魔法も満足に使えない癖にあなたを従えているなんて」

「こんな主じゃ、直ぐにメガトロンも私に愛想をつかしちゃうかもね」

半ば自暴自棄気味に叫ぶルイズ、そして彼女の声に応えるものがないた。

「ルイズ様、お顔をお見せください。傷がついています。」
「！！！！」

ルイズは始めラヴィッジが喋ったのかと思っていたが、喋ったのは目の前にいる己の顔程の大きさをした虫のようなものであった。それは細く長い六本足を器用に使って身体を支えている。

顔には二つ円柱状のパーツがあり片面の部分が赤く光っているためそれが目の役割を果たしているのだと理解できる。

「あなたは誰？見たところラヴィッジと同じように金属でできているみたいだけど、」

「申し遅れました、俺はドクター。ドクタースカルペル。メガトロン様に仕えている医師でございます。」

ルイズが問うたところ目の前にいる虫のような物体はメガトロンやラヴィッジの身体を保守・点検する医師であるという。

普段はラヴィッジの胸部格納庫に収まっていて、仕事の際にでてくるらしい。他にもラヴィッジは似たような存在を複数保管しているというのだから驚きだ。

「それで、私の傷を見てくれるの？」

「ええ、メガトロン様にもルイズ様が傷を負った際には最優先で治療にあたるようにと、きつく言い含められていますから。」

とスカルペルは述べると肩に跳びついて爆発の際に生じたルイズの右ほほの軽い切り傷を治療し始めた。

何かよく分らない光線を傷口に照射しているドクターにルイズは尋ねた。

「ドクター、メガトロンは今どこで何をしているの？」

「メガトロン様は今現在南西400リーグの上空で大陸を測量しています。」

「な・何をしているのよあいつは」

「ルイズ様の身の安全を守るプランを練るためには周囲の地形、生物の分布、気候などの情報を集めなければならないと申しております。」

「メガトロン様はルイズ様がいるこの大陸のことを何も知りません、故に早急な測量に出かけたのでしょう。ご安心くださいメガトロン様は不死身です。」

「でしょうね。あいつだったら・・・」

ルイズは昨日の出来事を思い出す。軽々と大穴をつくるあの力、人型からヴィークルモードに変形して高速で空を滑空することもできるあのゴーレムの優秀さを彼女は思い知ることになる。

エイリアンタンクにしがみついていた彼女は余りの速さから学院につくまでに己の意識を手放していた。

（その後学院では、空を飛ぶルイズの巨大な使い魔に関する話題で騒然となったのは当然の帰結と言える。）

「ルイズ様、治療が終わりました。」

「えっ！もう終わったの？すごいわ、ドクター。あなたは、優秀な医師ね」

とルイズは頬を触って頬の傷が消えたことを確認するとドクターを褒める。彼は満更でもないように自らの手腕を誇っていた。

魔法が普及しているハルケギニア大陸では怪我人や病人の治療と言えば水属性のメイジによる治療が一般的である。

その中で魔力を使わずに怪我を治療することが出来るドクターのような存在は貴重なのであろう。

ルイズは己の使い魔の優秀さを噛みしめると同時に彼らに負けないように自分も更に努力を重ねようと決意を新たにするのであった。

・ラヴィツジ：追跡、潜入のエキスパート strength rank 4

・スカルペル：膨大な解剖学の知識を有する、医師 strength 1

第五話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第五話

メガトロンは大国ガリアに連なる火山山脈上空を亜音速で滑空しながら考えに耽る。

何かがおかしい、ここに呼び出されてから何かが自分に起こっている。

思えば今までの己の言動、不可解な点が多すぎる。

なぜ使い魔になることを承諾したのか？考えれば最初は抵抗したもののごく自然に承諾していた気がする。

通常の自分であればルイズを即座に叩き潰していたはずだ。宛ら人間が小さな子虫を踏みつぶすかのように。

しかし、己はそれをしなかった。何故か？何度か考えてみたが答えは判然としない。

加えて、今の自分には記憶が大幅に失われている。幾度も復元を試みたが全て失敗に終わった。残留していた記憶を繋ぎあわせてみたが己を除いた殆どすべての記憶が失われている、という事実が改めて浮き彫りになったことを再確認して終わってしまった。

メガトロンは自身の記憶に関する思考を打ち切ると元々の目的へと己の思考を傾注する。

膨大な記憶を失ったメガトロンの目下の懸案事項はルイズだ。

自身が忠誠を誓った小さな主を守ること。

目的を忘失した今の彼が考えることは唯々それだけだった。

メガトロンは真下に広がる雄大な山脈の詳細な地形データを記録し

続けていたが、急速に極超音速まで加速すると自身のレーダーが探知した大きな熱源反応へ向けて降下を始めた。

「主に手土産を用意せねばな。」

山脈の火口付近には、ターゲットにされたことに気づかず眠りかけている生物が幸せそうな寝息をたてている。彼にターゲットにされたそれには、全く以てdon't mindとしか言いようがない。

第六話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第六話

ヴェストリの広場は、魔法学院の敷地内「風」と「火」の塔の間にある中庭である。

そこにはこれから行われる”決闘”を見物しようとする生徒たちで、広場は溢れかえっていた。

青銅のギーシュとゼロのルイズの決闘は学院生の間で驚異的に広まり、殆どの学生たちの知るところとなった。

「諸君！決闘だ！」

その広場の中心、決闘を申し込んだ男子生徒、ギーシュは薔薇の造花を掲げ高らかに宣言をする。うおーッ！見物人から歓声が巻き起こる。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はゼロのルイズだ！」

ギーシュは腕を振って、歓声にこたえている。

一方、決闘を受けたルイズは杖を握りしめ目の前の男子生徒を睨みつけていた。

人だかりの最前列では、ルイズの使い魔であるラヴィッツジがギーシュを巨大な赤い単眼でねめつけている。

その周囲のみは巨大な獣の迫力に気圧されて、キュルケとタバサという二人のトライアングル・メイジのみがいるだけだった。

事の発端はシエスタと呼ばれる学院に従事しているメイドがギーシュの落とした香水を拾ったことだった。

その香水を切っ掛けにして彼の二股がバレたわけだが、ギーシュは原因を彼女に擦り付け叱責した。完全な八つ当たりだ。

二股が露見した原因が彼にあることは周囲も分かっているはずだが、誰もそれを注意することはない。

時々、野次や歓声を飛ばすことはしても目の前の罪無き少女を救おうとする気は無いらしい。

少女の顔は、既に気の毒なほど真っ青になり今にもその場に倒れそうなほどだった。

ルイズの顔に怒りがこみ上げ始める。

何故ならば、この光景は彼女の目指す貴族とは似ても似つかないものだったからだ。

「ギーシュやめなさい！」

ルイズはそういつて毅然と彼を諫める。

「もうそれぐらいにしたら？ 元はといえばあなたが二股するのがいけないんじゃない。」

「その通りだギーシュ！ お前が悪い！」

ルイズの尻馬に乗った誰かがそう言うのと周囲がどっと笑い出した。ギーシュの顔が赤くなる。

「ふん。確かにゼロのルイズは平民と仲良くしているのがお似合いだろうな。」

だが、ギーシュは薄い笑みをこぼしながらそういい捨てた。

「なんですって？」

その言葉を受けルイズの顔にはいつそこの怒りが満ちる。

「魔法が使えないゼロは平民と仲良くするのがお似合いだと言ったんだよ。そうだろう諸君！」

「その通りだ！」

「魔法も使えないゼロは黙ってる！」

ルイズを罵る言葉に反応してラヴィッツは周囲にいた生徒たちを唸り声をあげて威嚇する。

その恐ろしい音に恐怖した幾人かの生徒はその場を逃げ出した。しかし、

「つ・・・使い魔に擁護されるとはやっぱりゼロはゼロだな。」

ラヴィッツに怯えながらもギーシュは黙らない。腐っても軍人の家系ということだろうか。

更なる侮辱の言葉にルイズは叫ぶ。

「ギーシュ・ド・グラモン！ 私、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールはあなたに貴族として決闘を申し込むわ！」

「もちろん、使い魔抜きの一対一よー！」
その一言で周囲の声がピタリと止まった。

「とりあえず、逃げずに来たことはほめてやるうじゃないか。」
ギーシュが余裕の態度でそう言ったのを見て、ルイズは答える。

「誰が、逃げるのですか。」

「と・・・所であれば本当に介入してこないんだろうね。」
ギーシュはラヴィッツを戦々恐々と言った感じで指さすと彼女に問う。

「ええ、私が命令したんだもの。あなたの相手はこの私よ！だれにも邪魔はさせない。」

とルイズが言うのを聞いてギーシュは安堵したように息を吐く。もし眼光に力があるのなら彼はとくにラヴィツジに睨み殺されているだろう。

ラヴィツジはギーシュを睨みつけ、ルイズを心配するかのよう to 鳴いた。その姿にルイズは

「大丈夫よ、ラヴィツジ。あなたの主を信頼しなさい。」
と声をかける。そして、二人の決闘が始まった。

決闘は終始ギーシュの優勢で推移した。

ギーシュが錬金した青銅の女兵士、華美な装飾が施された甲冑を身に着けた乙女は容赦なくルイズを蹂躪した。

青銅でできた兵士の体当たりや脚撃は次々と彼女の体に傷をつける。ルイズも錬金の魔法で幾体かの兵士を破壊したが無駄だった。

ラヴィツジは己の主が痛めつけられる様を見て爪を打ち鳴らし、牙を剥いてギーシュを威嚇するが、ルイズの命を決して破ろうとはしなかった。

「なかなかやるじゃないか、ルイズ。僕のワルキューレを相手にここまでやるなんてね。見直したよ。」

「だが、ここまでだ。どうだい、そろそろ降参してみては如何かな。」

ギーシュは額に浮かんだ汗を拭いながら問う。
しかし、ルイズはにべもない。

「まだよ、私は絶対にあきらめない。」

「約束したのよ、ラヴィッジにドクターにそしてあいつにも・・・私は絶対に負けないって。」

あいつやドクターとは誰なのか、ギーシュには分らない。しかし、満身創痍にもかかわらず一切退かないルイズを見て彼は覚悟を決める。

「いいだろう、ルイズ。これで終わらせる！！」

「いけっ！！ワルキューレ！！敵を気絶させる！！」

残存した三体のワルキューレがルイズの意識を断とうと武器を構え、腕を振り上げる。

魔力が底をつき全身に負った傷や打撲で、もはや満足に体を動かすことすら出来ない彼女はそれでも前を見据え、杖を構えていた。

観客の最前列で決闘を観戦していたキュルケはルイズの身を案じていた。

「まったく、あの娘ったら。無茶ばかりして」

「タバサ、これが終わったら直ぐに治療してあげなさいな。」

と言うと、キュルケはタバサと呼ばれた青髪の少女があらぬ方向の虚空を見つめているのに気が付く。いつの間にかルイズの使い魔であるラヴィッジも同様の方角を見つめていた。

「どうしたの？タバサ。」

するとタバサは虚空へ指をさして言った。

「来る。」

「来るって何が？」

キュルケはその方向を見据えると地平線の先に小さな黒点があるこ

とを知る。

それはグングンこちらに接近しており、その接近に伴って見知らぬ音が辺りに響くようになる。

周囲の学生たちもそれに気が付いたのか一斉に指をさして何事かと騒ぎ始める。風と水を操るトライアングルメイジであるタバサであるからこそ空気の微細な変化を感じ取って一足早くその存在に気が付いたのであろう。

音速を超える速度で飛来したそれは轟音を辺りに撒き散らしながら広場に着陸する。

「主よ！！無事か？！！」

それはラヴィツジから緊急信号を受け取って急ぎ学院に帰還したメガトロンであった。人型にトランスフォームした彼は広場に着地するとルイズの安否を伺う。

そして自分の主に危害を加えた相手を見つけると左腕から幾本もの細い金属製アームを出現させ一瞬でギーシュを地面に押さえつけた。

「小僧・・・俺様の主によくも危害を加えてくれたな。殺す！！殺してやる！！！」

「貴様の肉片を一片残らず蒸発させてやる！！」

怒鳴りつけるように叫ぶメガトロンの言葉を聞いてギーシュは恐ろしさのあまり口から泡を吹いて気絶していた。

するとメガトロンはギーシュを捉えている腕とは反対側の腕から巨大な刃を取り出した。

ジャキンツという音とともに出現したそれは、ルイズの身の丈を遥かに超えるほど巨大で果たして刃と呼んでよいのか分らないほどに長大で禍々しかった。

ギーシュの四肢を切断しようとするメガトロンに取り縋る一人の少女がいた。

「や・・止めて!! 彼を殺さないで!! お願い!!」

そう叫び声を上げギーシュを抑えつけるアームに何かが飛びかかる、それはギーシュの恋人であるモンモランシ-であった。

二股を掛けられても彼に対する愛情は揺らいではないのであるろうか。

ギーシュの延命を必死の形相で叫ぶモンモランシ-。

しかし、メガトロンは意に介さない。ギーシュを一刀両断にしよう
と 刃を振り上げる。

「やめなさい! メガトロン! お願いだから彼を殺さないで!」

ルイズはドクターによる治療を受けながらメガトロンに懇願する。

「何故だ!! 主よ、主はこの虫に殺されかけたのだぞ!!」

「メガトロン、これは決闘よ。ラヴィツジに手を出さないでとお願いしたのも私。」

「この怪我も決闘によって生じたものよ、彼に非はないわ。」

メガトロンはルイズの命に従って武器を収めた。その様子を見守っていたルイズはメガトロンに声を掛ける。

「でも・・・ありがとう、メガトロン。また助けられちゃったわね。」

ルイズは微笑みながらメガトロンに謝辞を述べた。彼は、主を守るのは当たり前だと述べると再びヴィークルモードに変形して離陸し、広場を後にする。

こうして、ギーシュとルイズの決闘は終了した。この決闘の後にルイズをゼロと罵るものは学院には一人もいなくなっていた。

第七話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第七話

トリステイン魔法学院から南へ5リーグの森の中、パンツという小気味の良い音が周囲に響く。森の中にある広場には、桃色がかったブロンドの長髪・鳶色の瞳を持った小柄な少女と一匹の巨大な獣、そして身の丈10メートルを超える巨大なゴーレムがいた。

獣は心配そうに小柄な少女を見守り、巨大なゴーレムは己の土管のように太い腕を振るって何かを少女に説明しようとしている。

少女は明らかにオーバーアクション気味なゴーレムの説明を真剣に聴き入っていた。

「主よ、もつと腰を落として重心を下げるのだ。」

「こ・こ・こつかしら」

「そうだ、目線は前方に固定しろ。ターゲットから目を離すな。」

「腕が震えているぞ！！主よ！どうしたというのだ。」

小柄な少女、ルイズは己の両手で持っている小さな鉄の塊に更に力を込め、5メートル程離れた位置に置いてある木を削りだして作られた的に向かって引き金を引いた。

その塊から射出された何かは一瞬で的を射貫きその先にある地面に突き刺さった。

「や・・やったわ！！メガトロン！！当たった！当たったわよ！！」
ルイズは諸手を揚げて喜んでいる。

「うむ。主よ、よくやった。だが、まだまだだ。」

「最低でも30メートルは離れた位置にある的を射ぬけるようになれば実践では使い物にならん。」

「加えてあれば、静止している的だ。戦場で木偶のように佇んでいる敵がいるか？」

「咄嗟の判断力も必要だ。いつ、どこで敵が狙っているとも分らない道のは長いぞ。」

耐えられるか？ゴーレムは暗にそう問うているのだろうか。しかし、ルイズは嬉々として叫び返す。

「望むところよ！メガトロン。さあもつと練習しましょう！」

そういつてルイズは、それを構えなおす。その鉄塊は洗練された美しいフォルムをしていた。

円柱状の穴が5つある部品が独特の形をしたフレームに覆われている。

砲身は全長で5 سانتほどであろうか。小柄なルイズの手のひらにフィットした持ち手には赤くこつこつとした皮がまかれている。

スミス&ウエッソンM36-10 回転式拳銃に酷似した武器を握った彼女は自身の使い魔に銃撃練習の続きを促した。

時は少し遡る――

ギーシュとの決闘の翌日、ルイズは自身の右腕に巻かれた包帯を外しながら窓外にいる自身の使い魔に話しかける。

寮塔の三階に位置している彼女の部屋は本来であれば何者も覗きこむことは出来ない。

しかし、10メートルを超える体躯を有しているメガトロンには関係の無い話であった。

「だから、大丈夫よ！メガトロン。ほら！もう治ってるから」

「ドクターの治療ってば凄いわね！！もう後も残ってないわ。」

昨日までルイズの腕には酷い打ち身や打撲痕が散見されていたが、ドクターの治療を受け今日にはすっかり完治していた。

（余談だがドクターの手腕を見たところ水属性治療師は衝撃を受け、修行の旅に出発してしまったらしい。）

ルイズは腕を振って自身の健全性をメガトロンにアピールするも、彼の表情は苦渋に歪んでいた。

「主が危機に瀕しているにも関わらず傍に控えていないとは・・・
使い魔失格だ。」

「主よ、不甲斐ない俺を許してくれ」

「メガトロン・・・私はあなたに感謝こそすれ、恨んでなんかいないわ。だから頭をあげて頂戴・・・そうじゃなきゃラヴィッジも居たたまれないわ。」

とルイズは部屋の隅で縮こまっているラヴィッジを指して言う。メガトロンはラヴィッジに樂にしてよい、と言うと再びルイズと向かい合う。

「主よ、これを受け取ってほしい。」

「？」「これは何？」

「予めドクターに造らせておいたものだ。先日のこともある。これから必要になるだろう。」

それは小さなイヤリングであった。

横2 سانت縦5 سانت程度の黒い薄板状の物体がアクセサリーとして付属しており、華美な装飾は施されていないが上品で落ち着いたデザインをしている。

ルイズはメガトロンの巨大な右手からそれを受け取って言う。

「ありがとう！！メガトロン。中々センスいいじゃない。これ、一体どうしたの？」

「身に着けてみてくれ、主よ」

「いいわよ。」

ルイズはイヤリングを右耳に取り付けると振り返る。

「ど……どうかしら。似合う？」

『主よ、聞こえるか？』

「……！」

ルイズは驚いた。目の前にいるメガトロンは何も喋っていない。代わりに己の身に着けたイヤリングから音が聞こえるではないか。

「メ……メガトロン……！これは何なの？」

「簡易の小型双向無線機と言ったところだ。」

「半径数百リーグであればいつでもどこでも通話することが出来る。」

「

「加えて主の居場所もそれがあれば特定することが出来るだろう。」

これで直ぐにでも主のもとに駆けつけることが可能になる。」

「よ、よく分らないけど、す……すごいわね、これ」

ルイズはイヤリングを触りながら呟いた。

「ね……ねえ、メガトロン！」

「どうした？主よ。無線機に不具合でもみつかったのか。」

「ち違うわ……！そ……その、だから……えっと……」

「？」

「そ測量わ……！測量はおわったの……？メガトロン」

「まだだ、北、そして南のデータを少し採取せねばならない。」

「そ……それだったら……！わ……！私も連れて行きなさい……！メガトロン。今度はちゃんと空を見てみた　いのよ……！」

「授業はいいのか？」

「構わないわ……！少しくらい大丈夫よ！」

「いいだろう、主よ。都合がいい。」

「都合ってどういうこと？」

「見れば分かる。」

メガトロンは外着に着替えたルイズを掌に乗せると慎重に地面に降ろした。そしてヴィークルモードに変形する。

「メ！メガトロン！！これってもしかして！！」

「コックピットだ。主を伴うためには必要だと判断した。」

ヴィークルボードとなったメガトロンにはコックピットが装備されていた。砲台の基部にあたる部分にはアクリルのような湾曲した透明板が見られる。内部には一つの座席と幾らかのスペースが両隣に設けられていた。

「さあ、ラヴィッジ、そして我が主よ。乗ってくれ。」

「ええ、お願い！！メガトロン、私を空の旅に招待しなさい！！」

「了解した、主よ。」

そして、ルイズを乗せたエイリアンタンクは雲一つない晴天の空へと向かって離陸した。

第八話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第八話

6千メートル級の山々が連なる火山山脈、

ライカ樺と呼ばれる落葉樹を中心とした植物が多く群生したゲルマニアとの国境を埋め尽くす大森林地帯。

荘厳な雄姿を誇る浮遊大陸アルビオン。

ルイズはヴィークルモードに変形したメガトロンに乗って自然あふれるハルケギニア大陸の景観を存分に堪能していた。

彼女だけでなく傍らに控えたラヴィツジも物珍しいのか落ち着きなく空からの景色を眺めている。

座席のシートや緩衝材に成火竜から剥ぎ取った骨や皮が使われているとメガトロンから聞かされた時は頭を抱えた彼女だが、今では無邪気な子どものように空の旅を楽しんでいた。

「メーメガトロン！！あっちよ！あっちに向かって飛びなさい！！」

「広い・・・こんなに海は広がったのね・・・」

「み！見て！！メガトロン！野生のヒポグリフの群れよ！！大発見だわ！！」

「ち！ちよつと！メガトロン？！火竜の群れに襲われちゃってるじゃない！大丈夫なの？！」

「え？駆除する？！駄目よ！！これ以上殺しちゃダメ！！いい？！分かった？！」

メガトロン一行は複数のトラブルに見舞われたが概ね順調に旅程（ほぼルイズの気まぐれだが）をこなしていた。

ルイズも興奮した面持ちで旅を楽しんでいたが、数時間もすると落ち着きを取り戻したのかゆったりと窓外の景色を眺めるようになる。

『主よ、満足したか』

「ええ、メガトロン、最高よ。あなたは優秀な使い魔だわ。」

『この程度であれば何時でもご覧にいれよう。』

メガトロンとルイズはイヤリングを通して言葉を交わす。自身の使い魔と言葉を交わす彼女の表情は満ち足りていると同時にどこか寂しげであった。

ルイズは地平線の果てまで続く広大な砂漠を物憂げに眺めながら考える。

私はなんて弱いのだろう、と。

誇れるような主になる、と大見得切ったにもかかわらず、使い魔に心配をかけるだけの己が嫌になる。ギーシュのワルキューレが一方的に自身を攻撃する中、ラヴィツジはどのような思いで爪を打ち鳴らし、牙を剥いていたのだろうか。

ルイズは座席の横で丸くなっているラヴィツジに手を乗せると優しく撫で始めた。

もしラヴィツジがああ決闘に介入していれば自身は何の労力もなく勝利を手にすることが出来ただろう。この獣は己が苦戦したあのゴーレムたちを容易く引き裂き、噛み砕くのだろうか。

否、雑兵には拘わずにメイジ本体であるギーシュの息の根を真つ先に止めていたかもしれない。

「強くなりたい。」

ルイズはぽつりと呟いた。

「強くなりたい。」

先ほどよりも大きい声だった。

「強く！！強くなりたいたい！！！」

「強くなつて貴方達と一緒に戦いたい！！」「守られるだけじゃなく貴方たちを守りたい！！」

「私は！！私は強くなりたいたい！！！」

それはゼロと蔑まれ続けてきた一人の少女の心からの叫びだった。相手を見下し、嘲笑う醜い感情に一人立ち向かっていた彼女は強い心を持っている。

今まで通り一人であれば傷つけられるのは彼女だけだった。

しかし、今の彼女は一人ではない。

彼女を守る使い魔がいる。

彼女を信頼するしもべがいる。

彼女を思ふ友達がいる。

強い心を持つ彼女は己の無力さによって仲間が傷つくのをただ黙って見ていることは出来なかったのだ。自身の主の心からの叫びをメガトロンとラヴィッジは何もせずに黙って聞いていた。

メガトロンはルイズに問う。

『主よ、その言葉に嘘はないか。』

「ないわ。」

ルイズは即座にメガトロンの問いに答えた。

その声は貴人のように高尚な気風を有し、凜とした彼女の雰囲気からは雑念の類は一切感じられない。

『そうか・・・了解した、主よ。』

『俺は魔法とやらのことは分らない。だが、違う領域からであれば

主をサポートすることが出来る。」

『ドクター。あれを主に。』

「はい、メガトロン様。ルイズ様、これをお受け取りください。」
スカルペルがラヴィッツの胸部格納庫から出てくるとルイズに何かを差し出した。

「？」「メガトロン。これは何？」

『主だけのための、武器だ。』『明日から主には幾つかのメニューをこなしてもらう。』

「これが・・・私だけの武器。」

ルイズはスカルペルから渡されたそれをじっと見つめていた。するとメガトロンから通達を受ける。

『主よ、日没予定時刻まで一時間を切った。帰還するぞ。』

「分ったわ、メガトロン。・・・また私を空の旅に招待しなさい。

ぜ！絶対だからね！！分かった？！」

『いいだろう、主よ。必ずだ。』

この日初めて、ルイズは自身が生涯に亘って使い続ける一つの武器を手に入れた。

第九話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第九話

ハルケギニア大陸の漫遊旅行から帰還したルイズは翌日から様々なトレーニングに取り組むことになる。

基礎的な体力トレーニングから銃の分解・メンテナンスなどメガトロンがルイズに課した訓練は多岐に亘った。

授業が始まる前の早朝、終わったのちの放課後等の比較的自由な時間帯に訓練は行われたのだが、

決して楽ではないそれらの訓練を彼女は歯を食いしばり、時には泣き出しそうになりながらも必死でこなしていく。

しかし、不思議と彼女から泣き言の類は一切発せられなかったという。

ギーシュとの決闘から数日後、ルイズは休日である虚無の曜日を利用してラヴィッジとの模擬実践訓練を行っていた。

右手で銃を構えたルイズは木陰に己の身を隠して辺りの様子を伺う。ルイズの勝利条件はラヴィッジの腰に取り付けられた木製の的を打ち抜くこと。逆にラヴィッジの勝利条件は的を射貫かれずにルイズの背後を取ることだった。

本日既に何度もラヴィッジに敗れている彼女は今度こそはと、鼻息を荒くする。

「（・・・ふふふ、見つけたわ、ラヴィッジ。頭隠してなんとやらね。）」

ルイズは樹木の淵から覗いているラヴィッジの尾を見つけて会心の笑みを浮かべる。ゆらゆらと揺れている尾に変化がないことを確認

すると腰を落として駆け、対象までの距離を一気に縮める。

（主よ、トリガーを引くときは必ず二回だ。）

（一発目はターゲットへ向けて。）

（二発目は一発目の半径3センチメートル以内に間髪いれずに続けて撃ち込め。）

メガトロンの助言を脳内で反芻しながらルイズは銃を構える。

「捕まえたわ！！ラヴィツジ！！」

ルイズは木陰に回り込むと銃を突きつける。

「！！！！」

しかし、そこにいたのはラヴィツジではなくホログラフ映像を照射しているスカルペルがそこにはいた。

スカルペルはルイズを己の視界に確認すると照射していた尾の映像を停止する。

彼女は辺りを見渡してラヴィツジの所在を伺うが、カチンツという音が自身の背後から発せられるのを聞いて両手を挙げる。

「・・・参ったわ。」

ラヴィツジとの模擬実践訓練は通算10戦10敗でルイズが負け越していた。

「ね、ねえ。んっメガترون。あ…あっ」

「わ私、少しは強く、はひゃうっ！！、な、なれたかしら・・・」

訓練後、ルイズはドクターによるアフターケアとしてのマッサージ

を受けながらメガトロンに自身の現状に問うていた。

健康な有機生命体の雄であれば間違いなく前屈みになるであろう声がルイズから漏れ出ていたが、金属生命体である彼は全く関知せずに質問に答える。

「以前と比較すれば格段に進歩していることは間違いない。」

「だが、あくまでもそれだけだ。」

「銃撃精度や身体能力は訓練すれば向上する。しかし、主には絶対的に経験が足りていないのだ。」

「先の訓練でもそうだが、視野が狭すぎる。敵は前後左右上下どこからでも狙ってくるのだ。前方だけを注視しては即、死に至るぞ。」

メガトロンからの厳しい批評を聞いたルイズは俯き落ち込んだ様子を見せる。それを見た彼は更に言葉をつなげた。

「主よ、焦るな。焦ったところで事態は好転しない。己の現状を正確に把握してからがスタートラインだ。」

「あまつさえ、どのような敵が立ちはだかるかと我々が駆逐する。主が心配することは何もない。」

「あなたと相対する敵の方に同情したくなるわね。」

拳を握りこみながら話すメガトロンに対してルイズは言葉を返す。それは己の使い魔の強大さを知っているが故に発せられたのだろう。

事実、ルイズの認識は概ね正しい。

しかし、彼女は己の抱いていた認識が甘すぎることを後に嫌というほど思い知らされることになるが。

「ルイズ様、マッサージが終了しました。もう起き上がったてもよろしいですよ。」

スカルペルは俯せていたルイズに話しかけるとぼきぼきと指を鳴らす。

「ん、んん〜！はあ。ありがとう。とっても気持ちよかったわ。」

ルイズは起き上がると身体の調子確かめるように伸びをする。

身体の凝りが驚くほど解れたのかルイズは何かを確信したかのようにスカルペルに喋りかけた。

「ドクターあなたお店でも開けば間違いなく流行るわよ。私が保証するわ。」

「さあ、ラヴィッジ！続きをするわよ。 r e v e n g e i s m i n e ! ! ! 」

銃を構えたルイズは訓練の継続を促す。やや血走った目をした今の彼女であれば大型の空母でも撃沈できるのかもしれない。

気焰万丈な勢いはそのままにルイズはふと疑問に感じた事柄を自身の使い魔に尋ねた。

「そういえばメガトロン。どうしてこの広場に来る時、わざわざ遠回りをしているの？」

ルイズはヴァイクルモードのメガトロンが、毎回異なるルートを巡ったうえで広場に向かうことを思い起こしながら彼に問う。

メガトロンは真剣な面持ちでルイズの質問に答える。

「他の人間に主の武器の存在を知られないようにするためだ。」

「その武器はドクターが造ったものだ。この世界の人間が保有している技術水準では考えられないほどに優れている。」

「そんな物を主が保有していると周囲の人間が知ればそれはまず問

違いなく接收されるだろう。」

「もしくは主に迫り、量産化を企む輩が出てくるかもしれん。そうでなくても主の身に何らかの危害が及ぶ可能性がある。」

「主の周りにおける未確認要素は出来うる限り排除しておきたいのだ。」

「主よ、主も周囲の人間にその存在を気取られることがないように気を付けてくれ。」

メガトロンの説明を聞いたルイズは右手に持っているそれをじっと見つめる。

小柄な少女である彼女でも自由に持ち運ぶことが出来る携帯性、加えて一度に五発までの銃撃が可能である高い攻撃性能を持つそれは、確かにここハルケギニアでは類を見ないほどに優れているのだろう。

魔法が普及しているハルケギニア大陸でも銃という物の存在は確認されている。しかし、単発式であることや装填に時間がかかること、重量があり運搬に不向きであるなど複数の欠点があるため戦闘には積極的に用いられてはいない。

魔法という簡易で利便性が非常に高い技術形態が科学技術の発達を阻害している環境では銃を始めとした武器の改良が進まないのも致し方ないことだろう。どこかの禿げた中年の教師にでも見せれば有する技術的先進性から興奮のあまり残り少ない彼の毛髪は全てはじけ飛んでしまいかもしれない。

もしこの武器が量産され大衆に出回ったらどうなるのか、彼女はブルツと体を震わせると己の思考を打ち切る。

そして自身の使い魔からの勧告にしっかりと頷き返した。

「分かったわ、メガトロン。この武器の存在は誰にも教えない。知っているのは私と貴方たちだけよ。」

「さあ、ラヴィッジ。続きよ続き。次こそは勝ってみせるわ。」

ルイズの催促にラヴィッツは寝かせていた体を持ち上げて応えるが、何かを発見したかのように一瞬で体を反転させる。

そしてルイズのいた場所から対角線上にあたる森に向けて後脚部に設置された一対のガトリングガンの照準を合わせるラヴィッツは低い呻り声をあげて矢庭に警戒心を露わにする。

気が付けばメガトロンも沈黙のままに右腕の砲口を翳していた。

「・・・メ、メガトロンどうし」そこにいるのは分かっているぞ!! 虫どもめ。姿を現せ!!」

ルイズの声を遮ってメガトロンの怒声が飛ぶ。

すると複数の人影が木陰から転げるようにして現れた。

「ギ、ギーシュ! キュルケに、どうしてタバサまで!!」

現れた人影はルイズの同級生であるキュルケ達であった。彼女たちはきまりが悪そうな様態でルイズ達の元に歩み寄る。

「またこの虫か! いいだろう、挽肉にしてやる。」

「まっまままま待つてくれ!! 話を聞いてくれ!! お願いだ!!」物凄い風切り音をあげながらモーニングスターを振り回すメガトロンに対してギーシュは必死の形相で懇願する。

話を聞くと彼はルイズに対して件の決闘について謝罪をしたいのだという。

そのためにルイズ達一行の行き先の後を辿ってここまで来たのだと話すギーシュの謂いを聞いたルイズは半ば呆れながらも彼の謝罪を受け取っていた。

「それだつたらもつと早く私に言いなさいよ。そんな付け回すような真似をせずともよかったじゃない。」

「そ、それもそうだね・・・あはは。」

「どうせルイズの使い魔が怖くて言うに言えなかったんでしょ。こ

のへたれ。」

キュルケの突っ込みに心を挟られたギーシュは両手について頂垂れていた。落ち込んでいるギーシュをほったらかしてメガトロンは残る二人の少女に問う。

「小娘ども、貴様たちは何故ここにいるのだ？」

「私はただギーシュがこそそと動きまわっているのをみて面白そうだったからついてきたのよ。深い意味はないわ」

「まあ、黙って見ていたのは確かに悪かったわね。謝るわ。」

というときュルケはルイズに軽く謝罪する。タバサはというと真剣な面持ちでメガトロンを見つめていた。

「私にもそれを教えて欲しい。」

「……！！！」

驚きの声が周囲から漏れる。タバサの言うそれとは間違いなくルイズの持っている銃のことを指しているのだろう。

「タ、タバサ?! あなた何を言っているのか、分かっているの?」「キュルケはタバサの正気を伺うように彼女に尋ねる。しかし、タバサの表情は真剣そのものだ。

「主よ、この者たちに武器の存在を知られてしまったようだ。」

「これ以上の拡散を防ぐ意味でもこやつらを消してしまおう。」

「ばっ! ばか……!! 何言ってるのよ!! あんたわ!!!!」

メガトロンの右腕からブレードが展開されているのを見てルイズは叫ぶ。

放っておいたら己の使い魔はここにいる三人を殺してしまう。

そんな危惧が彼女の中に燦っているのであるうか、ルイズの叫びは悲壮な色を帯びていた。

残りの二人にしてもこの程度のことです。殺されてしまったては堪ったものではないだろう、キュルケに至っては完全なとばかりだ。

決闘の際の恐怖が蘇ったのかメガトロンの宣告を聞いたギーシュは既に白目を剥いて気絶している。

一方、原因を造りだした張本人であるタバサはメガトロンから殺すという脅迫を受けてもいたって冷静だ。

「私達を殺せば学院で騒ぎになる。得策ではない。」

「ほう、ならば得策とは何だ？」

武器を翳しながらメガトロンはタバサの声に耳を傾ける。

「秘密は順守する。誰にも言わない。これで解決。」

「.....」

「いいからメガトロン！さっさとそれ仕舞なさい！！」

難しい表情をしながら黙考するメガトロンに対してルイズは声をあげる。

こうしてる間にもモーニングスターは振り回され、ブレードは目の前にいる3人の人間を切り裂かんと翳されているのだ、

主であるルイズも気が気でないだろう。彼女の命が届いたのかメガトロンは武器を収める。

「貴様たちが情報を漏らさないと確約できる根拠はどこにある。」

「無い。私は約束することしか出来ない。」

「だから情報が周囲に漏洩していることが確認された時、改めて私を消せばいい。」

いっそ冷徹ともいえる自己分析にメガトロンは舌を巻く。先ほどから彼はタバサの迷惘に虚偽があれば即座に彼女を殺害する算段をたてていた。

しかし、メガトロンは彼女の体温・拍動・瞳の収縮具合などの身体データから彼女が嘘をついていないことが分ってしまったため

思惑が外れ、手を出せずにいたのだ。

「で、でもどうしてタバサはこれを習いたと思ったのよ。」

「私は強くなりたい。そのためであれば何でもする。ただ、それだけ。」

ルイズの問いにタバサは事もなげに答える。

その際のタバサの眼をみたメガトロンは奇妙な既視感をその身に抱いた。

まるで鏡あわせの自分を見ているかのような、

水面に反映された己と同じ何かを瞳に写した時のような、

そんな感覚はメガトロンをしばしの間支配したが、ルイズの呼びかけによって彼は思考の海から再び覚醒する。

後に彼は悟ることになるが、深い憎しみと力への渴望を宿した彼女の瞳はエネルギーの塊であるオール・スパークを得る為に何百体もの同胞を虐殺したかつてのメガトロンと同じ光を放っていた。

虚無の曜日同日同時刻、ルイズ達がメガトロンと生死の境を決定する問答を繰り返していた頃

緑の髪が美しく伸びた妙齢の女性と禿げ散らかした中年のおっさんが廊下で四方山話に興じていた。

現代日本であればまず間違いなくセクシャルハラスメントとして道行く人に通報されているだろう。独房にぶち込まれ悪ければ彼は極刑に処せられるのかもしれない。

窓から射す光が彼女の長い緑髪を輝かせている。彼女はトリスティン魔法学院の学院長であるオールド・オスマンの秘書を務めているミス・ロングビルという名の女性だ。

中年のおっさんはミスタ・コルベール。図書館からの帰りであろうか彼は幾つかの書籍をその手に所有していた。

二人はにこやかに時には笑いも交えて会話を行っている。

「いやあそれにしてもミス・ロングビルはお若いのにとっても博識ですなあ」

「研究熱心な先生にはとても敵いませんわ。もっと色々なお話を聞かせてくださらないかしら？」

ロングビルの言葉に気をよくしたコルベールはより彼女の気を引こうと饒舌に語る。

彼女はコルベールの話に相槌を打ちながらも時折質問を返し、会話を盛り上げていた。

「そういえばミスタ・コルベール、宝物庫のことはご存知？」

「貴重で価値のある、もしくは危険性があるマジックアイテムを封印している倉庫ですな。それがどうかされましたかな？」

「ええ、あの場所にはあまりにも嚴重に固定化や対魔法の術がかけられていると小耳にはさみまして、中には一体何があるのかと少し興味がありましたの」

コルベールはロングビルの期待に応えようと記憶を探り、かつて宝物庫に入った際に見分した品々を紹介していく。

彼の話聞いた後の彼女の瞳は妖しい光を放っていた。

「確かに、そのような品々が保管されているのであれば、あれほどの嚴重な管理も頷ける話です。」

「盗難の被害に遭うことなど有り得ないのでしょうかね。」

「ふむ、一見すればそうなのですが、私にはそうは思えないのですよ」

「まあ、どういう意味です？ ミスタ・コルベール」

そして、コルベールは以前宝物庫に入室した時に感じた宝物庫の弱点についての自説を話し始める。

ロングビルはいかにも興味津々といった風に聞き入っていた。

「あの扉は魔法に対する対抗措置にばかり傾注していて、物理的な衝撃に対する予防をおろそかにしているような気がするのです。例えば……」

熱心に己の見解を喋り続けるコルベール。

コルベールが話を終えるとミス・ロングビルはにこやかに笑って答える。

「とても興味深い話でしたわ、ミスタ」

会話を続けながら二人はその後も学院の廊下を連れ立って歩いていた。

第十話（前書き）

オリジナル設定多数、ご都合主義等ご容赦ください。

第十話

後のルイズやキュルケによる説得の甲斐もあつて渋々であるがメガトロンは3人の殺害を撤回することとタバサにも銃撃の教授を施すことを了承した。

「主よ、何故この小娘にも銃を教えねばならぬのだ。」

「いいじゃない、メガトロン。減るわけでもないし、それに……
・強くなりたいっていう気持ちは痛いほど分かるから。」

無然とするメガトロンを宥めるようにルイズは話しかけるが、彼は未だに納得はしていないようだ。

その表情からはタバサという青髪の少女に対する不信感がありありと窺い知れる。

そんなタバサはラヴィッジとうまが合ったのか何故か睨めっこをしていた。

美少女と獣、中々にシュールな光景だ。

「おい、その小娘。」

「……」（睨めっこ中）

「貴様だ！！貴様に言っている！！聞こえているのか小娘よ！？」

「何？」

激昂するメガトロンとは対称的にタバサの様子はいたって冷静だ。

「貴様の適性を判断する。魔法を使ってみせろ。」

「分かった。」

タバサはメガトロンの命令に素直に頷くと杖を構え呪文を唱えた。

「ウィンディ・アイシクル」

彼女が呪文を唱え終えると無数の氷の槍が辺りに咲き乱れる。タバサが得意とする風系統の呪文に水の系統を重ねた氷の属性を持つ複合魔法だ。

メガトロンは己の顎に手を当てながらタバサが放つ氷槍を見つめていたがしばらくすると興が冷めたかのように頭を振る。

「ふん、この程度か。くだらん。」

「ちよつと！メガトロン！！口が悪いわよ。」

「主よ、俺様は本心から述べたまでだ。口に年貢は掛からん、俺様がどのように評価しようが自由なはずだ。」

「心配せずとも命は守る。安心してくれ、主よ。この小娘用の武器はまたドクターに造成させる。数日の内には出来上がるだろう。」

己の使い魔による遠慮ない劣評にルイズは口を尖らせるが、彼は落ち着いて己の主に向けて答えを返した。

そして、メガトロンはルイズの隣に立っているタバサに向き直ると言葉を掛ける。

「小娘よ。完成次第、貴様に渡してやる。それまで待っている。」

「感謝する。」

普段から感情の起伏を表に出すことが少ないタバサの表情には僅かながらも与望の色が垣間見えていた。

「主よ、今日の訓練は終了だ。帰還するぞ、乗ってくれ。」

「分かったわ、メガトロン。今日も色々教えてくれてありがとう、また一歩強くなれたような気がするわ。」

「当然だ、何といってもこの俺様が直々に教鞭を執っているのだから。上達せん訳がないわ。」

キウルケやギーシュ達が広場を後にしたのちもトレーニングメニューを続けていたルイズはメガトロンの促しに従ってトリステイン魔法学院へと向かうべくヴィークルモードとなったメガトロンに乗り込もうとしていた。

コックピットの座席についたルイズに対してメガトロンは神妙な様子で話しかける。

『主よ、武器を他者に供与するなどといった向う見ずな行為は今後出来うる限り控えてほしい。』

『このような行いが続けば主の周囲における安全保障上の機密管理に致命的な毀損が生じかねんのだ。』

「分ってるわ、メガトロン。分ってるわよ。でも・・・やっぱり黙って見ていることなんて出来ないわ。」

「何故強くなりたいのか、その理由は分らないけれど、彼女の・・・タバサの抱いている感情は紛い物なんかじゃない。」

「あの時何でもすると言ったタバサからは、決然とした意思と燃え盛るような憎しみを確かに感じたのよ。」

ルイズはイヤリングから聞こえる使い魔の声に応えながら広場におけるタバサのことを思い返していた。

凍てついた目をした少女はどのような思いをその胸に抱いているのだろうか、ルイズは少々の葛藤の後に己の使い魔であるメガトロンの意を決して話しかける。

「ね、ねえ・・・メガトロン。」

『何だ？主よ。』

歯切れの悪いルイズからの問いかけを聞いたメガトロンはその先を促す。

「お願いがあるの・・・聞いてくれるかしら。」

『構わない、何でも言ってくれ。』

『俺様は主の使い魔だ。主の役目を叶えるのは使い魔の役目だろう、遠慮することはない。』

「うん、ありがとう。あのね……」

メガトロンの促しを受けてルイズは頼みごとの内容を話し始める。

『何だと？！何故そのようなことを俺がせねばならんのだ！！』

『正気は大丈夫か？！主よ、どうか考え直してくれ！！』

ルイズの頼みごとを聞いたメガトロンは先程とは一変した態度を露わにする。ルイズに再検討を促す彼の声にはどこか哀愁の感情が漂っていた。

使い魔からの必死の陳情を聞いた彼女はやや尻込みしていたがそれでも己の主張を撤回することはしなかった。

ルイズは更に言葉を重ねてメガトロンの懇願する。

「お願い、メガトロン。これはあなたにしか出来ないのよ。」

「こんなことを頼めるのもあなただけ、私じゃあ相手にすらならないわ。だから、だからお願い。」

『………了解した、主よ。その任務承った。』

『だが！！あくまでも最優先事項は主の護衛だ。これだけは譲歩できん。』

『任務は任せろ、主の命は必ず俺が完遂する。主が余計な気を回すことは何もない、安心してくれ。』

しばし、メガトロンは煩悩していたが気を改めるようにしてルイズのお願いに対する答えを返した。

「ありがとう、メガトロン。あなたが私の使い魔で本当に良かった。

ルイズは眦にややうれし涙を溜めながら己の使い魔に感謝する。
彼女を乗せたエイリアンタンクは地平線に沈みゆく太陽を背景に魔法学院に向けての飛行を続けていた。

小柄なルイズよりも更に小さい少女の青い瞳にはおよそ年齢に見合
わないであろう様々な感情が宿っている。

増悪、怨毒、悔恨、怨嗟

それらの負の感情は心を蝕み、精神を侵食し、憎しみのままに生き
る彼女の強力な糧となり少女を支えていた。

とある男の手によって父親を、母親を、果てには自分自身の存在す
らも奪われてしまった少女は何を思い何を為そうとしているのだろ
うか。

ルイズではその一端を垣間見ることすら出来ない圧倒的な絶望を抱えた少女にはこれから先、幾多の試練と様々な困難が待ち構えている。

青い瞳を持つ少女、タバサはそれらの艱難辛苦を一人孤独に、或いは大切な仲間とともに克服し、乗り越えていくことになる。

が、それはまた別のお話。

ここではないどこかで語られる物語は少女が憎しみから解き放たれる一つの過程、

孤独な少女が得難い仲間と大切な友人を手に入れる一つの成長譚。

いつか来る未来、少女は偽りの己を捨て、本当の自分を取り戻す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8581x/>

ゼロと忠実な使い魔達

2011年11月11日20時56分発行